

小学校

光村ポケット 国語

読書単元から広がる 本との出会い

教科書では、1学期に2か所、「本は友達」という読書単元を設定しています。単元での出会いや活動を通して、児童が進んで本を読みたくなる、知りたいことを図書館で見つけられる。読書を国語の時間に閉じるのではなく、日常へ広げるきっかけにしましょう。櫛谷孝徳先生による指導のポイントとともに、紹介します。



多様な学び方がいきる授業のアイデア 連載第1回
協働的な学びにおける個別最適な活動



光村図書



LINE公式アカウント友だち募集中!
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



読書単元から広がる本との出会い

4月 図書館に親しみ、使えるようになる



「図書館の達人になろう」(4年上35ページ)

「図書館に行ってみよう。」「読みたい本を見つけられるようにになりたい。」と児童が思えるように、写真とともに図書館などの施設の使い方を示しています。読みたい本を探したり、知りたいことを調べたりする方法を学ぶことで、児童が必要なときに図書館を使えるようになることを目指します。

✓ 自主的な読書への指導のポイント

授業で図書館を訪れることにきっかけに、児童がその後も日常的に本に親しめるようにすることが大切です。

低学年のうちは、遊びの延長のような感覚で構いません。図書館で読み聞かせを行うなどして、図書館に親しむ機会を作ります。そうするうちに、児童は、自分の好きな本を見つけられるようになるでしょう。

中学年以降は、いろいろなことを調べるために図書館を使うことも増えてきます。知りたいことに合った本を図書館で探す方法などは、この単元で押さえるとよいでしょう。それにより、児童は目的に応じて図書館を活用できるようになります。(櫛谷孝徳先生)

教材名・活動一覧

2年 図書館たんけん (本の分け方、並べ方を知る)	4年 図書館の達人になろう (ラベルや司書の役割を知り、必要な本を探す)
3年 図書館たんていだん (日本十進分類法の「類」などから本を探す)	5年 図書館を使いこなそう (日本十進分類法を活用して本を探す)
	6年 公共図書館を活用しよう (公共図書館などの施設について知る)

教科書で出会う本や活動をきっかけに児童の読書の世界が広がるよう、年間2か所に読書単元「本は友達」を位置づけるとともに、「読むこと」の単元末や巻末付録でさまざまな本を紹介しています。

7月 交流を通して、読書を広げる



「本のポップや帯を作ろう」(4年上104ページ)

児童がなかなか出会わないであろうジャンルやテーマの本に触れる機会となるように、科学読み物や写真絵本などの多様な作品を掲載しています。児童が自分の読書生活を振り返り、さまざまな本と出会って友達と交流することで、一人一人の読書が広がっていくことを目指します。

✓ 自主的な読書への指導のポイント

活動をするときには、教師が魅力的な例を示し、何に気をつけたら、友達に本のよさがより伝わるかを意識できるようにします。例えば、ポップや帯を作る場合には、印象に残った1文や続きが気になるようなあらすじを書くなどの工夫を示すとよいでしょう。効果的に指導することで活動が豊かになり、児童は友達を紹介している本に自然と手を伸ばしていきます。

また、読書の交流は、日常的に行うことも大切です。ICT機器を使って、紹介したい本の表紙を撮影して友達と共有するなど、手軽に継続して取り組める方法を取り入れるとよいでしょう。ただし、著作権へ配慮し、学校内での使用に留めるなど留意が必要です。(櫛谷孝徳先生)

教材名・読み物一覧

1年 むかしばなしを よもう / おかゆの おなべ (昔話)	4年 本のポップや帯を作ろう / 神様の階段 (写真絵本)
2年 お気に入りの本をしょうかいしよう / ミリーのすてきなぼうし (絵本)	5年 作家で広げるわたしたちの読書 / モモ (長編)
3年 本で知ったことをクイズにしよう / 鳥になったきょうりゅうの話 (科学読み物)	6年 私と本 / 星空を届けたい (ノンフィクション)

さらに

「読むこと」単元末 「この本、読もう」



「白いぼうし」(4年上34ページ)

教材に関連するテーマの本や、学習したことを使って読むことができる本を紹介しています。

巻末付録 「本の世界を広げよう」



「本の世界を広げよう」(4年上140ページ)

児童の多様な興味に応え、ぴったりの1冊が見つかるように、さまざまな本を紹介しています。

読書の空気が流れる教室 櫛谷孝徳 先生 (筑波大学附属小学校教諭)

教室で行う朝読書は、1回15分程度の場合が多いと思います。短時間の読書はもちろんよいのですが、私はあえて1時間ほど集中して読む時間を設けるようにしています。短い時間で区切ってしまうと、長編の物語などは、おもしろいと思う前に時間が終わってしまうことがあるためです。

また、一人ではなかなか本を読む気が起きない児童にとって、教室での読書はよい機会です。読書は一人で行うものですが、友達が夢中で読んでいる空気の中でなら、「自分も読んでみよう。」と思えるからです。

児童から読みたいという気持ちが生まれるような環境づくりをすることで、児童の読書の世界は広がります。



協働的な学びにおける個別最適な活動

子どもたち一人一人の多様な学び方がいきる授業は、どのように実現できるのでしょうか。授業づくりのポイントを、3回にわたって、**桂聖先生**（共愛学園前橋国際大学准教授）に教えていただきます。第1回は、協働的な学びにおける個別最適な活動についてです。

Q.1

多様な学び方がいきる授業とは、どのようなものですか。

多様な学び方がいきる授業とは、多様な子ども一人一人の得意な学び方がいきる授業のことです。教室には、多様な子どもがいます。それぞれの子どもには、得意なことや苦手なことがあります。話すことは得意だけれども、書くことが苦手な子ども。一人で考えるのは得意だけれども、話し合いが苦手な子ども。同じ学び方では、こうした多様な子どもの学び方のよさをいかすことが難しいです。だからこそ、一人一人の学び方がいきる授業を設計することが重要です。

Q.2

それは、それぞれの児童が個々で学習を進める授業ということでしょうか。

もちろん、個々で学習を進める授業を設計することも重要です。しかし、現在の多くの授業が協働的に行われていることを踏まえると、まずは、協働的な学びの中で個々の児童の多様な学び方がいきるように、授業を改善することが大切です。

協働的な学びでは、子どもにとってのバリア（学習障壁）が多いです。例えば、「自分の考えをノートに書きましょう。時間は5分です。」のように、教師は明確な指示をよく出します。しかし、それでは、5分で書き切れずに書くのを中断しなければいけなくなる子どもや、早く書き終わって他の子どもが書き終わるのを待ち続ける子ども、一人では思いつかずに5分間じっと待つだけの子どもが現れてしまうでしょう。このような状態で、「5分たちました。みんなで話し合いましょう。」と指示しても、国語が得意な子どもたちだけの発言で授業が進むことになります。

多様な学び方をいかす鍵は、まずは日常の「協働的な学び」を、全ての子どもが参加できる形へとアップデートすることにあります。

Q.3

協働的な学びにおいて、多様な学び方をいかすようにするには、どのようにすればよいでしょうか。

私のおすすめは、自分の考えを書く場面において「選ぶ活動」を取り入れることです。

例えば、「まいごのかぎ」（3年上）の授業では、中心人物の「りいこ」の行動を確認したうえで、その中でいちばん「よけい」だったと思う行動を書くという学習活動を設定しました。その際、次のことも伝えました。

- 一人で考えても、友達と相談しながら考えても、どちらでもよいこと
- 考えを書き終わったら、席を立ってさまざまな友達と書いたものを見せ合うこと

一人で考えることが難しい子どもは、友達のアドバイスを聞いていました。早く書き終わった子どもは、立ち歩いて、たくさんの友達と書いたものを交換して読んでいました。それぞれの子どもが、自分の時間を有効に活用して学ぶことができました。

このような活動は、教師にとっても有効です。書き終えた子どもが自由に交流を始めることで、教師は「座っている（＝困っているかもしれない）子ども」に寄り添い、個別の支援に注力することができます。

「選ぶ活動」は、協働的な学びにおける個別最適な活動といってもよいでしょう。ぜひ明日からの授業でも試してみてください。



光村図書

教授用資料

発行日 2026年4月10日
発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)
イラスト 小幡彩貴

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

